

虫の歌 久永草太

・きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む

後京極摂政前太政大臣

言わずと知れた、百人一首に所収される一首である。小生、生き物好きにつき、夏の虫であるキリギリスが霜の降るような晩秋に鳴くものかと思っていたのだが、古語でいう「きりぎりす」はキリギリス科ではなくコオロギ科の皆さまとのことらしい。ここ数日でぐんと冷え込んだ我が家の庭では、古語の方のきりぎりすがしきりに鳴いている。秋の虫の声を愛でるのは日本特有の文化である、と小耳に挟んだ折、友達のオランダ人を動員して実験すると結果は「Noisy」とのことだった。この調べを心地よいと思える風土を有難く思う。

さて、この秋の嬉しい事柄のひとつに、伊藤一彦「さなぎだに」の短歌研究賞受賞があった。

- ・冷房の室外機こぼす水にゐる小さき青蛙寄り道らしも
- ・少雨降る塀の蝸牛の触角の先端は目か光をもてり
- ・同じ場所に網張りてゐし細小の緑の蜘蛛の今朝見あたらす

「短歌」二〇二一年十一月号 伊藤一彦

挙げたものは「さなぎだに」のはじめ三首に当る。いずれもむしへんの小さな生き物たちに取材していて、その視線は少年の好奇心のようにも、老兵の洞察のようにも見える。受賞作発表号の

「短歌研究」二〇二二年九月号の中で、馬場あき子は同箇所に触れて、「一連のはじめに青蛙や蝸牛、蜘蛛や小鳥などが登場するものらしい」「冷房の室外機こぼす水にゐる小さき青蛙」への注目にも今日の生の異状化した姿が捉えられ、雨蛙の生のいじましさに現代そのものが反映している」と評している。

かく言う馬場も虫をはじめ小さな命たちに心を割く人と思う。角川「短歌」二〇二二年十月号は全歌集刊行一年を迎えた馬場あき子特集で、さまざまの人の馬場論が並ぶのだが、面白いのが、東直子は「ありとあらゆる命を愛づる」、富田睦子は「虫への興味」と題し、それぞれに馬場の虫の歌を取りあげ、それぞれに馬場の虫の愛で方を分析しているのである。

・命なりけり命なりけりと鳴きゐたる蟬が来てゐる網戸しづかに

「飛種」馬場あき子

「あさげゆふげ」

・あぢさゐの花の迷路に分け入りて母を探してゐる青い虫

「記憶の森の時間」

前述の評論で紹介された数々の虫の歌から、いくつか取り上げた。ゴキブリのような避けられがちな虫に「同居」という言葉を「致し方なし」とはしながらも用いていて、笑えるようでありつつ尊ぶべき姿勢でもあろうと思う。

同号で馬場への特別インタビューを伊藤一彦が行っている。窪田空穂の話から始まる記事は大きな歴史書であるが、馬場と伊藤があふたり向き合うその卓上にもし、きりぎりす一匹がちよいと出てきたら、どんなやり取りがあったらうかと、妄想が尽きない。